

## ■ 続編 阪神淡路大震災を乗り越えて（※業界紙面よりの抜粋）

●近江商人の家に生まれた初代音吉は、15歳の時、神戸の庄屋・柴屋金左衛門の家に婿養子となり、明治維新を迎え「これからは洋服の時代だ。」と予見し、神戸の旧居留地で明治2年（1869年）17歳の時、日本初の英国調スーツのテーラーをオープンしていたイギリス人カベル氏の一番弟子となる。明治16年（1883年）日本人初のテーラーとして独立し、**（金）**柴田音吉洋服店を創業する。商標である父の名の一字金の文字を分解した「人ニハ?一」を「人には辛抱（芯棒）が一番」と読む。初代兵庫県知事・伊藤博文公にご最辰にされ、博文公の推薦で明治天皇陛下ご用達の洋服商となる。初代は博文公と共に「礼服には洋服の着用を定める」ように陛下に進言し、その後近代洋服が一気に普及する立役者となる。

●初代音吉は、明治23年に柴田家に婿入りした友蔵（2代目）が、大正にかけて約30年間、神戸周辺および北海道に10数箇所木材製造所を有する北海林業（株）を開業し、特にマッチに関しては業界では例がないほど大成功したため（兵庫県人物列伝より引用）、長女・千代に大正2年、源頼朝の重臣で、鎌倉武士の模範と称えられた（NHKテレビより引用）畠山重忠＜現在も埼玉県嵐山町に石像が残る＞の末裔である忠（3代目）を婿養子に迎え、後継者と決めた。

●忠は初代の没後（大正12年）、2代目音吉を襲名。当時としては珍しい東京外国語学校（後の東京外大）フランス語学科出身で、毛織物関係では政府派遣第1号としてフランスに留学。リヨンにて毛織物の勉強に励む。語学力に優れ、洗練された国際人で、内外に人脈を広げ、これも日本人としては最初に初代が晩年手がけていた服地の輸入、販売を本格化して、軌道に乗せる。特に、大正4年パリの毛織物商社、ドームル社との独占契約に成功し、全国に販路を広げた。このことは、後代への大きな遺産となる。また、初代を敬い、高野山の奥の院近くの表参道にある豊臣秀吉碑の正面近くに、初代音吉の碑を建立した。

●2代目音吉の長男である高明（4代目）は、父が昭和9年49歳の若さで他界したため、哲学に興味があり、大学教授になる夢をもっていたが、神戸大学在学中に家業を継ぎ、社長に就任。先代からの事業をさらに整備拡充、特に先の大戦後、回りすべて焼け野ケ原の中、奇跡的に類焼をまぬがれた、神戸元町3丁目の社屋にて、再建・再興に力量を発揮。まず洋服店を昭和22年に開店し、さらにドームル社もロンド

ンからスコットランドへ倉庫を移転しており、ロンドン空襲の被害をのがれていたため、戦争で中断されていた取引を再開した。昭和24年には、柴田商事（株）を設立し、ヨーロッパからの輸入服地のみならず、戦後日本の繊維商社の中では先駆者としてプレタポルテ・洋品雑貨の輸入卸の業務を軌道に乗せる。英国の「アクアスキュータム（レインコート）」、ドイツの「ペロ（ネクタイ）」「ピルツ（ハンカチ）」、スイスの「ハウザーマン（シャツ地）」等は、全国のデパート、ブティックで販売され、好評を得る。

昭和43年にはドーマル社（ロンドン・パリ）と業界初の合弁会社、柴田ブリティッシュテキスタイル（株）を発足させ、1980年代には数多い輸入ブランド服地の中で、質・量ともに第1位の実績を維持するなど、画期的な成功を収めた。その当時、ドーマル社が世界最大の毛織物商社に成長したことは、4代目の大いなる貢献として大方のひとしく認めるところとなっている。その卓越した毛織物の知識とともに、特に財務関係に強く、グループ会社7社（従業員150人、売上高80億円）の経営にいかんなく力を発揮した。

弟禎三は、営業面で兄に協力した。85歳になり引退し、92歳で亡くなるまで3代目音吉にアドバイスを続ける一方、より完成度の高い洋服づくりを目指して挑戦する心を忘れぬよう、スタッフを常に激励することを忘れなかった。

●啓嗣（5代目）は甲南大学在学中、テニスのプレイヤーとして活躍し、卒業後はロンドンへ留学。語学力に磨きをかけ、サビルロウのテラー及び毛織物の研修と国際的なファッションセンスを養う。平成2年には3代目音吉を襲名すると同時に社長に就任。生来のファッション好きで、平成6年金門（株）を新設し、日本の服地卸商社として初めてミラノにバイング・オフィスをもうけ、紳士服地のプロデューサー（デザイン・商品企画）に優れた才能を発揮。特に、輸入紳士服地を語らせれば右に出るものがないと、内外の取引先から高い評価を得ている。

就任後、当グループを育てていただいた、世界の一流品をお好みになるお客様の「プレステージ・ファッションライフ」の提案をスローガンとするCI（コーポレート・アイデンティティ）を制定し、グループのコンセプトとして3つの1、つまり

- 1. THE FIRST IN HISTORY AND TRADITION 一番の歴史と伝統
- 1. THE TOP IN PRESTIGE AND CREATION 最高の風格と創造
- 1. THE BEST IN QUALITY AND ELEGANCE 最上の品質とエレガンス

を掲げる。

一方、90年代前半より低価格マーケットへの量販志向を強めるドーマル社と、販売方針の不一致が最大の理由により、平成9年、3世代82



年に及ぶ取引関係の終了を決断するにいたった。他方、その間、70年代後半より25年にわたり毎年最低4回はイギリス、イタリアを中心にヨーロッパへ出向き、商品企画・仕入れ及び情報収集を行い、その長年の実績が認められ、英国王室エリザベス女王御用達の榮譽に輝くロンドンの「J&J ミニス」、チャールズ皇太子ご愛用の「ジョンGハーディ」の服地ブランドを通じ、世界最大のテキスタイルグループとして知られるイリングワース・モリス・グループの毛織物商社部門と全面的な提携に成功する。さらに、フランスの文化と謳われているパリの「ジバンシィ」、イタリアの3大ファッションブランドの1つといわれているミラノの「クリツィア」、同じイタリアの最高級品質ウールメーカー「アニオナ」や、ロンドン・サビルロウの新進気鋭デザイナー「リチャード・ジェームス」を日本市場に初めて紹介し、さらにミラノのスタイリストとして有名な「フランコ・フェラーロ」など、ヨーロッパの代表的な服地7ブランドの導入に成功。高級品マーケットである全国約1500店のデパート、テラー、ブティック、アパレルメーカーから圧倒的な支持を得る。グループの扱う輸入服地「J&J ミニス」は平成天皇陛下のご愛用の榮に浴している。

当初順調な推移をたどっていた輸入服地部門の子会社は、90年代のバブルの崩壊と、それに加え、平成7年の阪神淡路大震災で、グループの神戸市内にある2カ所の営業拠点ビルが全壊し、その後遺症も大きく、また一流デパート・大型アパレルメーカーの倒産が相次ぎ、平成13年に整理するにいたった。同時に、大阪支社である第3ビルと東京支社である第7ビルを手放し、同時に帝国ホテルの店舗も撤退することとなる。

さらに元町4丁目にあった注文洋服部門の、グループ本社ビルである伝統格式漂う古風なレンガ造りの建物も倒壊したが、幸いテラーの生命線である約2万人の顧客の型紙、伊藤博文公をはじめとする歴史的価値のある洋服や、スタッフ全員も再度奇跡的に難を逃れた。大震災を乗り越え、平成9年に7階建てのビルに建て替え、7社あったグループ会社も3社に縮小され、現在は親会社であった(株)柴田音吉商店に全精力を注入し、2階店舗も予約制にし、サロン風に模様替えされた。従来、外商が主力であったが、背広の発祥地である英国ロンドンのサビルロウのテラーの本来の営業形態「ビスポーク」、つまりご来店いただき、お話をしながら注文を頂戴するスタイルへ移行しつつある。お客様は神戸近郊20%、東京から九州まで80%の割合で、全国に各界を代表する著名人の方々にご愛顧いただいている。誇らしいことには、2代目はもちろん、経済界では4代目社長、ドクターで3代目院長に、1世紀にわたりご最厚にされている。

今も伝統の技術を大切に守り、5代目が平成9年にオーダーメイドで世界で最初に考案した最新ファッションのモデルを取り入れた「スタイル・オーダー」を前面に打ち出した、手作り仕立てのお誂え注文洋服は、お客様の間で“芸術品の名にふさわしい”と、お褒めいただいている。

当店の工場長である稲沢治徳は平成16年「神戸マイスター」、平成19年には「現代の名工」に選ばれ、平成20年には黄綬褒章を受章するなど、業界を代表する技術者に認定される。

●平成21年秋には、従来の当店の縫製よりも約400g軽い、史上最軽量「ライトフィット」テーラード・ジャケットを発表。お客様より「こんなに軽くて着やすい替上衣は、今までに着たことがない。ニットのセーターを羽織っているようで、車を運転していても腕が動きやすく、また仕事をしていても肩がこらず、ストレスを感じない」と大好評で、更に喜ばしいことに「LITE-FIT」は平成23年春に登録商標を済ませ、平成24年夏には特許庁より実用新案特許を受理するにいたる。